

## 軍記物語の読みの変遷から考える戦争と平和

——近世の『保元物語』『平治物語』の一享受——

滝澤 みか

### 一、はじめに

日本には、いわゆる「軍記物語」という形で分類される、日本の歴史上実際に起きた戦乱を題材とした作品が存在している。現代において軍記物語が読まれる場合、国語の教科書を通してということが多いと言えよう。例えば現行の高校の「古典探究」の教科書においても軍記物語は採用されており、『平家物語』がその大多数を占めている<sup>(1)</sup>。以前の「古典B」の教科書でもそれは同様である。

これら軍記物語は改作されながら享受されてきたという特徴を持ち、『平家物語』と言っても様々な内容の諸本が存在し、また、『平家物語』が広く読まれ、その世界が広く浸透していくにつれ、他の軍記物語の作品が『平家物語』の世界と沿うように改作されていくという事例も生じていく<sup>(2)</sup>。それに加えて軍記物語は時代ごとの享受の変化も大きく、特に近代においては軍国教育を推奨する教材として使用されていたことは有名である<sup>(3)</sup>。そして戦後になると『保元物語』や『平治物語』、『太平記』は教科書からほぼ姿を消していくことになるように、定番と見られる教材も時代ごとに変わる場合があることが分かる<sup>(4)</sup>。このように享受史を顧みると、近代における軍記物語の受容の変貌は、戦争への影響も相俟って凄惨さが著しい。そうした時勢により作品や登場人物の捉え方が変わっていくことについての研究は多くされてきているが、物語本文の読みに焦点を当てても、やはり変化が起きるのは近代に限った話ではないと考えられる。

本稿では、軍記物語の中でも時代ごとの享受の差が顕著な傾向にある『保元物語』『平治物語』を対象に、諸本の中でも最も多くの人々に読まれた「流布本」と呼ばれる本文<sup>(5)</sup>を基軸に、通史的に両物語の在り方を捉える観点に基づく研究が少なかったためか、これまで研究が進められてこなかった近世の注釈書の世界を探ることで、作品の読みの変遷を捉えていきたい。軍記物語に分類される作品の多くと同様に、『保元物語』『平治物語』もまた、複数にわたる改作がされている。流布本の本文は中世末期である室町末・戦国期（1446～1560年前後）に成立したと考えられ、物語の大きな改作の最終段階に位置している本文であり<sup>(6)</sup>、近

世には版本として刊行され、近代においては教科書にも掲載されるといったような形で広く人々に読まれていった。その両物語の近世に作られた注釈書として、現存で最も古いものは『保元物語大全』『平治物語大全』<sup>(7)</sup>という書物となる。同書は1659年頃から1670年までに、多数の注釈書の制作に関わっている西道智という人物により作られたものであり<sup>(8)</sup>、流布本の本文を載せ、その上で各章段に「鈔伝記」なる語釈と、「評曰」という形で批評を付けている。すなわち、両大全は近世前期における『保元物語』『平治物語』の捉え方が窺える資料であることに加え、その内容を明らかにしていくことは、どういった読解がこの時代に広く読まれるべきと考えられていたかを把握することでもあり、軍記物語の解釈の歴史を探る一端となろう。そして近世の時点で読みがいかに変容しているかを捉えていくことは、本シンポジウムのテーマである「戦争と平和」の問題を考えることとも無関係ではないと考えられる。軍記物語の享受を精細に捉えていくことは、〈いくさを書いた文学〉が平和にも戦争にも影響を与え得ることを明らかにすることであり、軍記物語を読むことと「戦争と平和」との関係性の揺らぎの様相を理解することに繋がるのではないか。以上のような問題意識を持ちながら、『保元物語大全』『平治物語大全』の特徴を検証していきたい。

## 二、近世の解釈と物語本文との差異—言葉の使用状況から—

### (1) 批評語句の役割の解体

まずは物語本文と『保元物語大全』『平治物語大全』とで、批評の言葉の役割が異なることを確認していきたい。ここでは拙稿で論じた<sup>(9)</sup>、軍記物語や現実の武家社会で室町時代から用いられていく血気の勇者という言葉と、更にそれと同じ類と言える血気の勇という言葉に着目していく。血気の勇者および血気の勇という言葉は、軍記物語の中で批判的な意味で用いられていく批評の語句であり、現実社会においても戒めるべきものとして中世以降に作られた故実書などでも取り上げられている。そしてこれらは両大全にも使用例が確認出来るのである。次に挙げるのは、『平治物語大全』において、源義平が手勢十七騎を従えて、平重盛勢と対戦する章段に付けられた批評である。

悪源太十七騎にてかけたて追出しけるは。元来大将をはしめみなすぐれたる剛強なれば。弱兵千騎にも対応すへし。さりながら氣に乗たる大勢に。わづか十七騎にてむかはれしは不覚なり。小勢にて大勢を拉ぐは。五百騎ならば五十騎なるべし。究竟の射手を汰へ散々に射させば。内裏の庭前にこみ入たる敵なれば。あだ矢はあるべからず。思ふやうに射立させたゞよふところを。瓢風のごとく緊しく討て。前後左右にあひあたりなば。若干敵をうちと

り。大将もあやうからん。唯我勇にほこつて無謀にかゝり追まわしたるは。

義平若武者にて。血氣の勇なればなり。 (『平治物語大全』 第四・傍線論者)

着目したい箇所は傍線部分であり、少ない手勢で敵と応戦した義平のことを「無謀」であり、その行動の原因を若武者であり、「血氣の勇」であるゆえと見ていることが確認出来る。しかし、そもそも流布本『平治物語』の本文において、義平が若い武士であることは指摘<sup>(10)</sup>していても、彼に対して血氣の勇という評価を下すことは一切ないのである。すなわち、物語本文において「血氣の勇」とは言われていない人物に対し、大全ではそうした評価が下されていることが分かる。

この義平の例とは反対に、物語本文で「血氣の勇」とみなされている人物の評価が、大全では変わっている場合もある。『保元物語』の最後では、大島に配流された源為朝が後に再び戦いをし、最終的に朝廷側に討たれることとなる章段がある。『保元物語大全』ではその章段の批評末尾に「始終島にての所業。最後のありさま善とやいはん。悪とやいはん覚つかなき事どもなり」と書いている(第七)。流布本『保元物語』は、物語の最も末文を次のように記して幕を閉じる。

此為朝は、十三にて筑紫へ下り、九国を三年にうちしたがへて、六年おさめて十八歳にて都へのほり、保元の合戦に名をあらはし、廿九歳にて鬼が島へわたり、鬼神をとてやつことし、一国の者おぢおそるといへども、勅勘の身なれば、つるに本意をとげず、卅三にして自害して、名を一天にひろめけり。いにしへよりいまにいたるまで、此為朝ほどの血氣の勇者なしとぞ諸人申ける。

為朝は「血氣の勇者」であると判断されていることが確認出来ると共に、配流後に鬼が島へ渡った後も「勅勘の身」であることを記している。それに対して『保元物語大全』では配流後の島での振る舞いから「善とやいはん。悪とやいはん覚つかなき事どもなり」と指摘するように、為朝に対して善か悪か断定し難しく思っているような記述が見られる。島での様子も触れつつ「血氣の勇者」であると明示することから分かるように、流布本『保元物語』が本文全体で見せる為朝への批判的な評価<sup>(11)</sup>を貫くのととは、大全は異なっている。

そもそも血氣の勇者という言葉は、『保元物語』『平治物語』の諸本の中でも流布本段階になって初めて物語本文に登場する。流布本『保元物語』では合戦の中で最も実戦を担っている為朝に対して用いられ、流布本『平治物語』においては主君の源義朝を裏切り、命を奪った長田という人物にその評価が下されている。彼らはそれぞれ、物語が最も根幹とする〈秩序〉や〈武士の振舞い方〉といった価値基準に背いた行動を取っている人物であり、これらの評価の言葉が果たす役割は重いものと考えられる<sup>(12)</sup>。しかし両大全を見ると、物語とは異なる人物に

言葉が付与され、あるいは評価が変わっていることから、流布本両物語とは言葉が果たす役割も変化していると言えることに加え、価値基準もまた異なることを窺わせる<sup>(13)</sup>。

先に見たように、『平治物語大全』の批評部分においても、血気の勇という評価が下されているのは長田ではなく、義平である。義平は無謀に敵に応戦したために、その行動が批判対象となっている。無謀に挑むのではなく、謀を巡らせながら戦うことは両大全が重視していることの一つになる<sup>(14)</sup>が、このように無謀と評価されている人物は大全の中で他にも存在する。例えば、『保元物語』において、宇野七郎源親治が崇徳院の味方をするため上洛する中、後白河天皇側の平基盛と応戦する場面があり、『保元物語大全』（第二）はその評において「無謀のいくさして味方のよはるのみならず新院の御むほんいよ／＼露顕したるべし」とする。また、『平治物語大全』（第四）においても「義朝平家のはかり事におちて。無謀に敵を追あとを取きられたり」とする箇所が確認出来る。親治も義朝も「無謀」と記されているが、義平のように「血気の勇」とはされておらず、無謀を常に血気の勇という言葉と直結させるわけではないことが分かり、血気の勇という評価の言葉は大全において深く機能しているわけではない様子が見えてくる<sup>(15)</sup>。

更に、『保元物語大全』において、親治が基盛の戦闘に敗れ、生け捕りにされる章段の批評を挙げてみよう。

ちかくはかるはやすし遠くはかるはかたしとはいへども、めの前にて主を生どりにせさせおめ／＼とともに生捕にせらるゝは勇士の道にあらず。命をおしまず切てかゝり、いかにもして主に近付よつてさしころし主に後代の恥辱なきやうにはたらし討死せんこそ仁義の勇士とは云つべし。

（『保元物語大全』第二・句読点論者）

主君にとって恥辱がないようにどのように振る舞えば「仁義の勇士」であるのか、大全が良しとする行動がここでは示されている。これに加え、同書において、藤原頼長が乱後、矢によって重傷を負う章段の批評を見てみたい。

盛憲も初左府の御供につきたる人々は申に不及、経憲・延頼落行ずしてきたりて御供したりけるは誠に忠信なるべし。ひごろは被用重恩にはこりし人々もかゝる時節に至ては身のならん様をのみはかつて忠儀をもおもはず主君の行衛をもしらず、周章まよふ斗なるに、此時の忠儀はまことに仁義の勇にして英雄なるべし。（以下略）（『保元物語大全』第三下・句読点論者）

頼長（「左府」）に付き従う姿勢を「忠儀」とし、「仁義の勇」であると評価している。しかし経憲や延頼といった人々は物語本文では仁義の勇という評価は付されておらず、ここでも本文になかった評価が加わっていることが分かる。「仁

義の勇士」および「仁義の勇」は「仁義の勇者」と同様、「血気の勇者」とは反対に武士として望ましいとされる批評の言葉であり、室町時代以降に「血気の勇者」と共に使用されていく。流布本『保元物語』には血気の勇者という表現は出てきても、仁義の勇者という表現は全く登場しない。それは流布本『保元物語』が世が乱れることを強く批判する姿勢を持つゆえに、〈武〉を評価する言葉は用いないためと考えられる<sup>(16)</sup>が、その注釈である『保元物語大全』ではこのように仁義の勇士という言葉が登場している。すなわち、こうした仁義の勇者という語句の使用状況から見ても、物語本文と大全とで、作品の理解の仕方が異なっていることが分かるのである。

以上、血気の勇という批評の言葉が大全においてどのように現れるのかを分析してきた。流布本『保元物語』『平治物語』が物語全体の価値観に反していた者にのみ意図的に使用していた言葉は、両大全ではその役割は解体されて用いられており、両者には価値観の違いや作品の理解の仕方にずれが生じていることが分かるのである。

## (2) 「知仁勇」の使用に見る観点の移り変わり

このように、使用されている言葉から本文と注釈とで価値観や作品の理解の仕方が異なっていることが見えるのみならず、大全では新たな考え方が導入されていることも確認出来る。『保元物語大全』において、崇徳の謀叛について批評している記述を見てみよう。

かやうの大儀をおもひたつには知仁勇の三つをよくふんべつしておもひたつものなり。新るんの御むほん、知にもあらず仁にもなし。勇もかけたり。末代とても志慮あるべき事ぞ。 (『保元物語大全』第一・句読点論者)

崇徳が起こした行動を、知・仁・勇のいずれも欠けたものとして批判している。しかし、ここに見える知仁勇という観点は物語本文には存在しないものである。また、『平治物語大全』に記されている「三事相応」の語釈も見てみたい。

### 一三事相応

○本経の意は平治平安城平氏。此三つをいへり。しかれども本三事相応とは智仁勇此三つをいふなり。智は智恵、仁は五常のみち、勇はいさみなり。武略の達者なり。天下の達徳と中庸にもいへり。

(『平治物語大全』第四・句読点論者)

ここでは、物語本文で「平治」「平安城」「平氏」のことを指すと指摘しつつ、「しかれども」以下では「本三事相応とは智仁勇此三つをいふなり」と続けるように、語釈を付けた元の本文の文脈から離れ、敢えてこの考え方を示していることが分かる。

この知仁勇という考え方自体は、元々『中庸』<sup>(17)</sup>に「知・仁・勇三者、天下之達徳也」とあることに始まる表現であるが、軍記物語の中では早くから使用されている表現ではなく、『太平記』が初例ではないかと考えられる。次に挙げるのは、『太平記』<sup>(18)</sup>卷十六「正成兄弟討死事」の記述である。

抑元弘以来、忝モ此君ニ憑レ進セテ、忠ヲ致シ功ニホコル者幾千万ゾヤ。然共此乱又出来テ後、仁ヲ知ラヌ者ハ朝恩ヲ捨テ敵ニ属シ、勇ナキ者ハ苟モ死ヲ免レントテ刑戮ニアヒ、智ナキ者ハ時ノ変ヲ弁ゼズシテ道ニ違フ事ノミ有シニ、智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守ルハ、古ヘヨリ今ニ至ル迄、正成程ノ者ハ未無リツルニ、兄弟共ニ自害シケルコソ、聖主再ビ国ヲ失テ、逆臣横ニ威ヲ振フベキ、其前表ノシルシナレ。

ここでは楠正成こそ「智仁勇ノ三徳」を兼ねている者であるとしており、このように『太平記』に活用されていくことで、知仁勇を通して物事を批評する観点は軍記物語の世界に浸透していったのではないかと考えられる<sup>(19)</sup>。この表現は更に『太平記』の注釈書である『太平記秘伝理尽鈔』<sup>(20)</sup>にも用いられており、「未だ正成ほどの勇と智と仁との三つを備へたる良将を聞かず。異朝にも類ひ少なからんと謂しと也」と記されている（第三）。また、同書（第四）には知仁勇の考えについて、例えば次のように詳述している。

評云、第一に范蠡が「小勢を以て大勢を亡ぼしがたし」と云事、謂はれあり。其故は、軍の勝負は、第一、将の智謀・勇・仁によれり。第二には勢の多少によれり。第三には臣下の善悪によれり。第四には諸人の親和（親恐）によれり。第五には臣々威を争と争ざるとによれり。第六には戦場の形（形莊）によれり。此の六つに依て勝負あり。第一に将の智謀・勇・仁と云は、将は智無くんばあるべからず。（中略）此故に将の智謀と仁と勇と兼備したらんは、勢少なけれども勝ち、智・仁・勇無くんば多勢なれども負くべき也。又、智・仁・勇劣りたるは負け、勝れたるはかつ也。又、両大将智・仁・勇同じければ、多勢なるは勝ち、無勢なるは負くる也。（以下略）

『太平記秘伝理尽鈔』は近世に広く享受された注釈書であり<sup>(21)</sup>、道智も享受者の一人であった。それは道智が作成した『太平記大全』という注釈書から窺うことが出来、『太平記大全』は『太平記秘伝理尽鈔』を土台にしたものであることが先行研究により明らかにされている<sup>(22)</sup>。このように『太平記』から軍記物語で用いられ始めた表現は、『太平記秘伝理尽鈔』にも引き継がれており、そうした広がりの中、『保元物語』『平治物語』を解釈する中でも用いられていると考えられる。注釈の対象である流布本の本文が持っていた言葉ではなくとも、享受者自身が生きるその当時によく用いられている考え方を、解釈の世界に活用していることが分かるのである<sup>(23)</sup>。

更に、この知仁勇という観点を通した作品の理解は、近世に限定されるものではない。戦時中に刊行されている、富倉徳次郎著『保元・平治物語の精神と釈義』<sup>(24)</sup>(旺文社、1944刊)を以下に挙げる。

(中略) 武略としては、前述の高松殿夜討の献策に見られ、(釈義篇「新院御所各門々固めの事附けたり軍評定の事」参照) 情愛に就いては前述の父為義に対する心遣ひの外に、兄義朝に対し弟として射当て得べき矢を殊更憚つて兜の星に当てる遠慮に見られるのである。(釈義篇「白河殿攻め落す事」参照) これらは謂はば日本古来の国民の好みである、智仁勇の三つに該当するものであるが、この為朝を活躍せしめることによつて保元物語は新興階級たる武人の道義性の躍如たる物語ともなり得てゐるのである。

近代に刊行された『保元物語』『平治物語』の注釈においても、知仁勇という考え方が示されており、「日本古来の国民の好み」であるとさえ記されている。しかし、ここでは今度は為朝の行動を解釈する際に用いられ、『保元物語大全』と同じように崇徳の批評に見られるわけではない。このように、批評や考え方を示す言葉が継承されていたとしても、そこに内包されている使用の意図は時代ごとによって変わっていくことが分かるのである。

### 三、『保元物語大全』『平治物語大全』の視線

#### (1) 人物評価の変化—忠臣への注視—

注釈の理解の中で物語本文と違いが見えるのは批評や考え方だけではない。登場人物の捉え方や評価においても変化が見えることを、次に確認していきたい。

物語に登場する人物たちは両大全の中で、批判されることもあれば称賛されることもある。それでは、どのような人々が称賛される傾向にあるのだろうか。次に挙げるのは、『保元物語大全』において、乙若たち幼い兄弟が父為義の処刑後に殺されていく章段に付けられた評の全文である。

乙若がさいごの言葉。かしこくもあはれにも侍るかな。めのと三人ともに自害したる事。其ころの人民。上より下に至つて。忠をもすて。義をもわする狐狼の心ばかりなるに。おさなき主をしとふて死を共に仕たる事。ありがたき忠臣。したはしき振舞なり  
(『保元物語大全』第五)

乙若たちが処刑されることについては、その「さいごの言葉」に対して「かしこくもあはれにも侍るかな」と述べるに留まるが、傳三人(本文では傳四人と恪勤二人)については「振舞」を取り上げ、当時としては「ありがたき忠臣」として称賛している。乙若兄弟の傳たちを評価するという姿勢は物語本文にも既に見えるため、そうした方向性自体が乖離するわけではない。しかし、流布本では幼

い子どもの振る舞いも意図的に改変されるほど重視されており<sup>(25)</sup>、章段名に従えば話の中心は彼らであるが、大全では「さいごの言葉」に触れるのみに留まっている。それに対して「忠臣」とされる傳たちには、本文中には見られない「其ころの人民」の様子を敢えて記し、それとは異なることを理由に称賛を高めている。こうした忠臣という評価を明記される人物が、大全には何人か確認出来る。

葉室光頼も忠臣と明示されている人物の一人である。『平治物語大全』（第三）では惟方が信頼を裏切り上皇・天皇を脱出させる章段の評において、「先日参内の儀式すぐれたるのみならず。主上上皇を落し奉らるゝ事。みな光頼の作ところなり有がたき忠臣なるべし」と称賛されている<sup>(26)</sup>。光頼の説得により弟の惟方は心変わりをし、そしてそれにより上皇・天皇が信頼たちの元から脱出するという展開を取るため、光頼の行いは天皇たちにとって不可欠である。

また、先にも触れた、親治と基盛との戦いの章段において、『保元物語大全』では忠臣について言及する箇所がある。傍線部に着目しつつ確認してみよう。

基盛くんでおちかさなれとげちしたるは能智謀なり。小勢の強敵を大ぜいにて擒にするは、このはかりことにすぎず。まことにゆゑしきぶりやくなり。しかりといへども基盛いけどりの親治をめしつれ、内裏にきさんせしこと如何。そのあいだに敵何千かをとらんや。すこしちうしんのだうりかけたり。十六人のいけどりにはらうどうをあいそへ、そうもんをへ、我身はうぢぎにとゞまりしゆごしたらんは、まさるべし。もつとも十六人をいけどりしことは、ばくたいなれども、その日しゆごところをあけしは、じやくはいのゆへか。これにひはんあることなり。たとへば大功を成し、その日はいのちをまとうする。これ一つのぐんはうなり。また一つにはそのところのしゆごにおほせつけられては、たとへ敵なん万ぎありといふとも我討死のうへにては力なしとおもひ定る処、忠臣の其一つなり。然は基盛生とりをめしつれ帰たる事いか。又、親治主従已上十六騎ともに生どられし事、大将親治事は力なし。従者十五きは臆病至極せり。（中略）たとへ敵何千万ぎありといふとも、主を生捕にせられん事、十五きの従者のもの一人もいきては益なし。従者、真さきをかけ、郎等みな討死の上にてはぜひなき義なり。然ども又ふかき忠臣は主のならんするやうをみはてんとおもひ、ともに生捕にせらるゝことも有。（以下略）（『保元物語大全』第二・傍線句読点論者）

基盛の下知<sup>(27)</sup>を「智謀」、「このはかりごとにすぎず」とまず誉めつつも、逆接の後に「すこしちうしんのだうりかけたり」とあるように、忠臣の行動としてどうであるかという観点が入ってくることが分かる。そのような記述がされるのは基盛が捕らえた親治等と共に都に戻ったためであり、文脈と若干ずれつつも、守護に任命された以上、討ち死にを覚悟するまでに「おもひ定る」のが忠臣の在

り方であることを示している。さらに、「ふかき忠臣」は主の行く末を見届けるために共に生け捕りにされることもあるということも示し、主との関係を中心に、臣下の行動について説かれている。こうした表現を見ていくと、大全は主に最後まで尽く姿勢を忠臣に求めていると考えられる。基盛は大全が重視する<sup>(28)</sup>「智謀」により行動しているにもかかわらず、それとはまた異なる評価の基準も存在することが分かるのである。敗戦後、崇徳院が武士たちに別れを告げる章段の批評からもそれは窺える。次に該当記事を挙げてみよう。

為義忠正そのほか武士ども新院に一たんたのまれまいらせしばかりなり。又武士の着まいらせなば、却て敵御命をもうばひまいらす事ありなんと仰ければ、おち行けるもさもあるべけれども、さしあたりて見はなしたてまつりしは如何ぞや。家弘・光弘、難有忠臣なり。家弘は御室まで御供申、御いとまたまはり、出家したりけるは、さばかり忠信いたづらになりぬ。命はすてがたきものにこそと覚へ侍る。 (『保元物語大全』第三下・句読点論者)

批評は崇徳に付き従った武士たちに対してされている。崇徳が武士たちに離別を提案したのは、彼等といれば命が奪われることもあると考えるためであるが、大全は「おち行けるもさもあるべけれども、さしあたりて見はなしたてまつりしは如何ぞや」としており、たとえ主から別れを切り出されても、見放すことを良しとしていないことが分かる。そしてそれに続く形で、付き従った家弘と光弘を「難有忠臣なり」と評価する。その家弘も最終的には暇をもらい、そのことに対して「さばかり忠信いたづらになりぬ」とし、命の捨て難さを述べてはいるものの、最後まで主に付き従うことを大全では重んじていると考えられる。

しかし、最後まで側にいれば無条件で称賛されるわけではない。次に挙げるのは、同じく『保元物語大全』において、保元の乱後、逃げ落ちていく中で矢に射られ重傷を負った頼長が、父忠実に会いに行く場面における批評である。

左府。相国に御対面のためにおはして仰入れられたるに。相国かなしみ給ひ。すなはち迎たく思食けれども。悲しみのあまりに。いづかたへも行べしなど。まよひて宣ひしを。使の図書其色を見ずして。しひても申さず。立帰つて弱り給へる。左府にいひきかせ奉る事。いたつて愚なるか。然らずは悪心あつて成べし。左府聞給ひて。舌をくひきらせ給ふ事よく思食きりけん。兼て勇は備りたまふ人ならん。御最後はゆゝしく侍るなり。経憲御最後の宮仕し。出家せし事。誠に有がたき忠臣なり。 (『保元物語大全』第四)

ここでは瀕死の頼長に付き従う図書(図書允俊成)と経憲に対して評を述べている。経憲が頼長に「御最後の宮仕」をし、出家に至ったことを「誠に有がたき忠臣」と評価している。一方、図書が頼長に、忠実が頼長との対面を拒否し、「いづかたへも行べし」と言い放ったことを告げた行動について、「立帰つて弱り

給へる。左府にいひきかせ奉る事、いたつて愚なるか、然らずは悪心あつて成べし」としている。最期を看取れば必ず忠臣になるわけではなく、どういった行動をしているのかも注視されるのであり、「愚」でも「悪心」でもなく、誠実に仕えることが求められていると言える<sup>(29)</sup>。

『平治物語大全』も確認してみると、頼政が心変わりをし、後に源氏一族の義朝を裏切ることに対する批評を挙げてみたい。

頼政光泰光基など。信頼にくみしたるにはあらず。兎も角も君につかへんと  
の義なり。信頼悪逆とはしりながら。君の御座は内裏につかへ。君又六はら  
に行幸なれば。又六はらに伺公せし者なり。二心といへば二心。忠臣といへ  
ば忠臣なり。一門なれば義朝と一味したると見れば二心也。され共右に信頼  
反逆の始。此人々をたのみけるに。義朝一門の惣りやうなれば。それしたが  
ひ奉るうへは。子細に及ばずといはれければ。今か、れば別心とは批判する  
なり  
(『平治物語大全』第三・傍線論者)

頼政たちの主は信頼ではなく君であることをまず確認した上で、天皇の居場所により自分の立場を変える頼政たちは、源氏一族にとっては「二心」であるものの、一方でそれは「忠臣といへば忠臣」という考え方も示している。「別心」と批判する理由は検証しているものの、『平治物語大全』においても主に付き従うことにやはり重きが置かれていることが窺えるのである。

しかし、この点も流布本の本文に立ち返ると違いが見られる。流布本『保元物語』『平治物語』ともに、忠臣の存在には触れ、特に後者では臣下の在り方は重視もされているが、今まで『保元物語大全』『平治物語大全』で挙げた人物たちが忠臣という言葉で評価されているわけではなく、主に最後まで従うことに重点を置く見方も大全独自である。

このように大全が忠臣を称賛するのは理由があると考えられる。先出した、頼長が乱後、重傷を負う章段の批評では、付き従う経憲や延頼の「忠信」を「仁義の勇」という最上の称賛で飾る。それに続けて次のような記述をする。

若運をひらひて世もおさまりなば一番に忠賞あるへき事ならん。かならず闇  
主は是をもわきまへず、却て不忠の者を用る事あり。されば忠臣をうしなつ  
て世のみたれ近かるべし。  
(『保元物語大全』第三下・句読点論者)

忠臣を失うことは、世の乱れにも繋がると見ていることが分かる。世の乱れを引き起こさないためにも、忠臣の存在は重要である。流布本『平治物語』においても臣下を賞することは言及があるが、その対象は「勇士」であり、それゆえに流布本『平治物語』の関心の中心は武士へと向かい、武士として相応しい振る舞いを説いていくことになる<sup>(30)</sup>。忠節である臣下の重要性も説かれているが、義朝の忠節が特別視されていることが大きい。しかし、大全では義朝の忠節への特

別視はなく、主に最後まで尽くしているかどうかによって比重が置かれており、新たな人物評価の観点と共に、求める忠臣像も独自に持つのである。それは、物語本文とは別に、大全が重視するものが異なることを窺わせる。最後にそれを確認したい。

## (2) 心の「まこと」の重視

『保元物語大全』『平治物語大全』が忠臣に注目していた根底にはどのような価値観があるのだろうか。例えば『平治物語大全』（第四）に見える、甲を逆さに被った清盛を重盛が批判する章段に付けられた評には、「重盛父を蔑如したるは無礼也」とあり、清盛を息子である重盛が批判したことを「無礼」とする。重盛は『平家物語』において人格者として造型されている人物だが、そのようなイメージがあったとしても、父への礼儀がなくなれば、それを咎める姿勢を持つ。このように礼儀の有無に触れる箇所は両大全で他にも確認出来る。次に挙げるのは、『保元物語大全』の中で、乱後、崇徳の文庫を暴き、重祚の望みがあったことを改めて確認する章段の評である。

新院の御所を檢地せられし事。今度の御合戦にうちかち給ひて後。せめてやきすて給ふべし。かやうの封のつきたる文箱などをは。其まゝにてさぬきへをくりつかはさるべき御事なるに。ゑいらんあるこそうたてけれ。礼儀をおほしめさば。尋常の朝敵にても。かくあらまほしき事なるに。まして御連枝なれば。無下になさげなくも侍るかな  
（『保元物語大全』第六）

文箱から崇徳の望みを暴き立てるような行いを「うたてけれ」と評し、「礼儀をおほしめさば」という観点から、今回の崇徳はまして後白河と兄弟であることも含めて、天皇側の行いを「無下になさげな」いことであるとする。たとえ勝者であっても、そこに「礼儀」がなければ大全は批判するのである。

同書（第一）において崇徳の敗因と共に乱の経緯について述べた箇所では、「てんのなすところまたは孝行のみちをうしなひたまふゆへにほろびたまへり」と指摘し、鳥羽が崇徳を退位させ近衛を即位させたことを「大なる御あやまり」としつつ、その後も十四行にわたり崇徳が敗れたことを孝の観点から検証しており、「てんしより至<sub>二</sub>於<sub>一</sub>庶人<sub>一</sub>みな以<sub>レ</sub>孝為<sub>レ</sub>先よく敬しよく養はつねの可<sub>レ</sub>孝」と示し、父母の非を責めることは「不孝の第一」であり、「法皇の非をせめわが身をたてんとおほしめすこと」は「ふかうのつみをのがれたまはず。てんのせめにあたりたまへり」と指摘するように、心の在り方を問題としている<sup>(31)</sup>。

以上のように、忠臣の評価の軸が主に最後まで誠実に仕えているかどうかといった点であることや、礼儀や孝を大切にしていなければ批判対象に成り得ることに鑑みると、大全では心を尽くすことを重視しているのではないかと考えられ

る。それを踏まえると、大全が「心のまこと」について度々言及していることは看過出来ない。次に挙げるのは『保元物語大全』において、頼長が兄の忠通と不仲となり、新院と謀反を画策する章段に付けられた評である。

左府の御こと文才おはしまし仁義正けれども、世人悪左府と申ししこと理なり。がくもんもまことの無<sub>レ</sub>志仁義もまことの仁義にあらず。名聞利欲のためなるべし。わずかに道にこゝろざす人も、そのもとたがふところあり。あるひは古人の言句を甘て膠<sub>レ</sub>柱調<sub>レ</sub>瑟刻<sub>レ</sub>舟覓<sub>レ</sub>劍あるひは義をたて理を荷て人の非を算、賞罰をたゞし、よくぜひをわかち道をおこなふとおもへり。その学智みなかへつて邪智となれり。真じつのがくもんは、まづ一心のまことにより私よく人よくをさり、本来の可<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>明。念々の效<sub>二</sub>妄悪<sub>一</sub>旧染の有<sub>レ</sub>汚ことたれかこれをなげかざるべきや。終<sub>レ</sub>身までつとむるとも有<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>者<sub>一</sub>。何の有<sub>レ</sub>暇治<sub>レ</sub>人哉。たとひ信厚不<sub>レ</sub>争<sub>二</sub>名聞<sub>一</sub>といふとも未<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>人之氣<sub>一</sub>止<sub>二</sub>ことを不<sub>レ</sub>得して有<sub>二</sub>行事<sub>一</sub>忘<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>て分<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>邪正を捨て採<sub>レ</sub>正を。りひをはなれて理をおこなふは、まことの学とやすべき。(『保元物語大全』第一・句読点論者)

頼長の学問への姿勢について、「まことの無<sub>レ</sub>志仁義もまことの仁義にあらず」と指摘し、名聞利欲のための学びを非難する。そして真実の学問とは「まつ一心のまこと」に拠るものとしている。類似の言及は『平治物語大全』(第二)にもあり、信西に対して、その学を批判し、「心理のまこと」に立ち返ることを薦めている。このように大全が心や心理の「まこと」を重視するのをもまた、それが世の統治と関わるためと考えられる。以下は、『平治物語大全』において、天下の統治に必要なものを述べる箇所である。

およそ天下国家を治むるに。第一賢を用ゆるをもつて本とす。舜天下に撰んで。皐陶をあげしかば。不仁者は遠ざきぬ。代々の名王みなかくのごとし。たゞ人を知る事を要とす。すぐなるをあげてまがれるを捨おくとときんば民服す。誠なるかな此言や一人賢を用れば。万民賢に習ふ。一人佞を用れば衆みな佞に習ふ。此理りをしるといへども。時に至つて賢愚のさかひ。邪正の道にまよふ。何をもつてしらんとならば。本心の誠をつとめ。聖經を学んで。本来の明に帰り。よく照して撰むべし。(『平治物語大全』第一)

国を治めるには賢なる臣下の登用が根本に必要であるため、その判断が重要であると記しているように、賢愚の見極めは『保元物語大全』『平治物語大全』が重視するものの一つ<sup>(32)</sup>である。賢愚の判断に迷う場合は、「本心の誠をつとめ。聖經を学んで。本来の明に帰り。よく照して撰むべし」と示している。賢愚を見極めるためにまず挙げられることが「本心の誠」を務めることとなっており、心の誠が重要であることが分かると共に、それは国家の統治にも連動している。

賢愚の見極めを誤れば、国は乱れていく。そのことは次の『保元物語大全』に

も記述されている。

(中略) 惣じて天下の権をとる人は、一身を投てわたくしなく。聖学により。明德をあきらかにして。性にしたがふべし。わづかのわたくしあれども。天下の害となり。すこし不明にして。智のくらきも。大なるわざはひとなる。賢愚のさかひを弁ざれば。明哲の人はかくれ。不肖の人はすゝむなり。積善の余慶にて。威勢さかなれば。世おさまれるに似たれども。次第に道おとろへ。衆民邪悪の心となつて。治まるべからず。天のとがめあるによつて。あるひは火災水難。あるひは逆風地震国土をなやます。是天のなすところにあらず。人のなす所なり。終に兵乱うたがひなし。たれか是を嘆かざるべきや

(『保元物語大全』第五)

義朝が父である為義の処刑を決断する章段に付けられた評であり、賢愚の判別を誤れば、次第に道は衰え、人々は「邪悪の心」となり、統治もままならず、そしてそれは兵乱を引き起こすことになると見ている。そうならないために、大全では心のまことを重視していると考えられる。流布本『保元物語』では「信」「義」「道理」「王者の法」といったものに言及し、それらが守られた〈秩序〉の保たれた世を理想としていることを窺わせるが、心のまことに言及する箇所はなく、また流布本『平治物語』においても、臣下の問題に焦点を当てていても、その根本にあるのは序文に見える「任使其人をうるとき、天下をのづからおさまる」という、相応の職の就任が世の安定に繋がるという考えであり<sup>(33)</sup>、大全のように賢愚を重視したものではない。大全の独自性が見えるのである。

このような大全の考え方は、この評で「聖学により明德をあきらかにして」と説かれるように、「聖学」すなわち儒教も無関係ではないと考えられる。最後に、相良亨氏による近世前期の儒学に関する先行研究<sup>(34)</sup>に触れておこう。伊藤仁斎や山鹿素行の思想を検証する中、氏は次のようにまとめる。

仁斎は敬中心の儒学を正面から否定して忠信を説き、素行は敬中心の儒学にあきたらず不得已の誠を尽すべきことを強調した。忠も信も「まこと、である。敬中心の儒学に批判的な思想が「まこと、を重視する儒学として擡頭してきたのである。「まこと、を標榜してここに新しく擡頭してきたものは、素行・仁斎がそれぞれの一面を強調してきたところの、すなわち、内から湧き出る他者のためよかれと思う情を尽すことをもって、倫理の根本とするところのものであった。

近世前期における「まこと、を重視する儒学」の台頭を指摘し、その根本は「他者のためよかれと思う情を尽すこと」であると断言する。直接的な影響関係は断言することは出来ないが、これまで見てきた大全の傾向と、思想史の動きとで方向性が全く異なるわけではない様子は窺える。すなわち、近世において徳川幕府が

儒教を推奨していたことを考えれば、そうした近世の社会で求められた考えと軍記物語の解釈とが混ざり合っている不自然ではない。

しかし、これまでも指摘してきたように、それは中世末期に成立した流布本両物語の本文の意図からは変容しているものであり、近世における新たな解釈である。『保元物語大全』『平治物語大全』は流布本に付けられた注釈の中でも現存する中で最も古いものであるが、近世前期のこの時点で既に本文と解釈とでずれが生じていると言えるのである。

#### 四、おわりに

以上のように、流布本『保元物語』『平治物語』の本文を基軸に、近世に作られた注釈である『保元物語大全』『平治物語大全』の世界を探ることにより、軍記物語という〈いくさを書いた文学〉の読みがいかに移り変わるかを明らかにしてきた。両大全を見ていくと、流布本本文と同じ批評の言葉を用いていてもその内実は異なっており、人物評価の観点や重視するものも変わっていることが確認出来た。これらを踏まえて「戦争と平和」という本シンポジウムのテーマに立ち返ると、やはり物語と解釈とでずれが生じている点は看過出来ないものと考えられる。それは『保元物語大全』『平治物語大全』が注を付けている、流布本本文の特性に関わってくる。

冒頭でも述べたように、『保元物語』『平治物語』も複数にわたる改作がされており、流布本段階の改作の時代は社会の動乱期に当たる。そうした世情が安定しているとは言い難い中で改作された流布本の内容は、世を乱すことを強く戒め、統治には適切な任官や適した振る舞いの臣下が必要と説くものとなっている<sup>(35)</sup>。流布本『保元物語』では戦乱中の笑いが徹底して削除され、流布本『平治物語』では武士として相応しくないとみなす感情が削除されているのも、全てそうした全体志向に繋がっており、中世末期の動乱の時代にそのような内容で物語が改作されたのは、戦乱を楽しみ、乱世を望んでいるためとは明らかに考え難く、安定した治世を望んでいたからこそと考えられる<sup>(36)</sup>。しかし、そうした特性が以降の時代に完全に受け継がれているわけではないことは本稿で検証した通りであり、流布本本文においては「血気の勇者」として強く批判されていた、実戦を担った為朝への批判が薄らいでいることから明白である。大全も統治について必要なものを述べているが、それは流布本『平治物語』とは姿を変えており、流布本『保元物語』が持っていた戦乱を徹底して否定する姿勢も持たない。大全が念頭に置くのは自分たちの考える平和の在り方であり、それは原文とは別の観点からの平和である。すなわち流布本本文が最初に有していた特性は、近世の段階

で継承されているとは言い難い。

原文の内容から離れた解釈の変遷は、近代における戦時下が最も顕著である。しかし、原文の記述から離れていく解釈は、流布本成立後、近世に作られた注釈書の段階においても既に見られるものであることが分かる。すなわち、本文から離れ、その時代の社会によって解釈したいように物語を読んでしまうという問題は、近代の戦時下のような非常時に限った話ではなく、作品を読む際に容易に生じてしまう現象なのではないだろうか。たとえ物語本文が戦乱を忌み嫌い、平和を願っていても、読み手次第では戦争に活用されてしまう。時勢に応じて読みが変わってしまう〈いくさを書いた文学〉と「戦争と平和」の関係性は、その時代の人々の扱い次第でどちらにでも傾きかねない、振り子のような揺らぎを抱えているように見える。軍記物語の読みの変遷を捉えていくと、そうした戦争と平和のはざまに位置する、〈いくさを書いた文学〉の扱いの危うさが見えてくるのであり、本文を置き去りにしない必要性を感じさせるのである。

#### 注

- (1) 東京書籍・第一学習社・三省堂・明治書院・筑摩書房・大修館書店・桐原書店といったよく高等学校で使用されている教科書を見ても、『平家物語』は必ず掲載されている。しかし当然、軍記物語とは『平家物語』のみを指すわけではない。
- (2) 『平治物語』における清盛の人物造型が有名である。日本古典文学大系の永積氏の解説や、日下力氏「初期平治物語の一考察—陽・学の志向—」（『軍記と語り物7』1970・4）・同氏著『平治物語の成立と展開』（〈汲古書院、1997刊〉所収）に詳しい。
- (3) 大津雄一氏『『平家物語』の再誕』（NHK出版、2013刊）、同氏『挑発する軍記』（勉誠出版、2020刊）に詳しい。論者も以前「近代日本における軍記物語の発信—『保元物語』『平治物語』を中心に—」（〈『多元文化7』2018・2）、拙著『流布本『保元物語』『平治物語』にみる物語の変遷と背景—室町末・戦国期を中心に—」（汲古書院、2021刊）所収）において論じた。
- (4) 一方、「木曾最期」のように戦前から用いられ続ける作品もある。都築則幸氏「『平家物語』『木曾の最期』教材化の変遷—戦前から現在に至るまで—」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』20-1、2012・11）。田坂文徳氏『旧制中等教育国語科教科書内容索引』（教科書研究センター、1984刊）、阿武泉氏『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ、2008刊）、同氏『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品小・中学校編』（日外アソシエーツ、2008刊）も参照。
- (5) 永積安明氏『中世文学の成立』（岩波書店、1963刊）の分類による『保元物語』九類本・『平治物語』十一類本を指す。本稿では永積安明氏の分類を基礎に、犬井善寿氏・原水民樹氏の分類も参考にしている。なお、流布本の本文は永積安明氏他校注『日本古典文学大系・保元物語 平治物語』（岩波書店、1961刊）に拠る。
- (6) 上限は釜田喜三郎氏「更に流布本保元平治物語の成立に就いて補説す」（『神戸商船大学紀要文科論集1』1953・3）、高橋貞一氏「壺囊抄と流布本保元平治物語の成立」（『国語国文22-6』1953・6）、下限は拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の

- 成立期の下限—『榻鳴曉筆』との関係から—」（『国語国文83-7』2014・7、注3拙著所収）に拠る。
- (7) 以下、『保元物語大全』『平治物語大全』の本文は丹波篠山市教育委員会青山歴史村本を論者が翻刻したものをを用いる。引用本文における傍線は全て論者によるものである。句読点は私に補った箇所もある。ふりがなは省略した。
- (8) 拙稿「西道智著『保元物語大全』『平治物語大全』翻刻（一）」（『古典遺産71』2022・8）、拙著「西道智著『保元物語大全』『平治物語大全』翻刻（二）」（『古典遺産72』2023・10）参照。道智は軍記物語の注釈も多数手掛けている。
- (9) 拙稿「『血気の勇者』にみる室町期の語句表現とその展開—軍記物語を端緒として—」（『多元文化6』2017・2）。注3拙著所収。
- (10) 流布本『平治物語』では源頼政との応戦の場面において、義平の味方である俊綱が「わかき大将にておはしませば」と義平のことを述べている箇所がある。
- (11) 為朝の行いに批判的な姿勢はこの末文だけではなく、流布本『保元物語』で一貫している。拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の人物造型—為義・義朝像の拡大を通して—」（『国語国文86-10』2017・10、注3拙著所収）。
- (12) 注9拙稿。
- (13) 流布本『平治物語』において末文までその忠節が取り上げられ、物語の中で最も重視されている源義朝に至っては、『平治物語大全』（第四）では平家方が天皇を取り戻し、内裏への出陣の準備をする章段の評において、勝利が得られるとは思えない中で戦うこととなった彼に対して、「義朝勇士たるゆへなり。勝負も弁まえず血気によせしところなり」と批評する。血気の勇という言葉そのものではないが、「血気」と「勇士」という言葉が近い位置で記載される。流布本の物語本文では、義朝は作中で最も重視される人物であり、それをもって長田を批判する言葉として「血気の勇者」が用いられていると考えられるが、このように注釈書の中ではその義朝に「勇士」と「血気」という言葉を示していることから、「血気の勇」を取り巻く観点は、物語本文から既に変わっているとと言える。
- (14) 論者の口頭発表「『保元物語大全』『平治物語大全』における物語読解と教訓性の行方—軍記物語の古注釈書の一端—」（2021年12月5日、早稲田大学国文学会秋季大会）。論稿を準備している。
- (15) 『保元物語大全』（第二）において崇徳が為義を味方にしようと教長を派遣する章段の評では、「またいはく、為義るんがたになりしこと、みなわかき子どものけつきのゆへなり。為義まいりたまはずとも、子共は一人とものこらずまいらんといゝしによつて、しりよもなく院宣にしたがひしなり」（句読点論者）とあり、「血気の勇」ではないが「けつき」という言葉が見える（物語本文にはない）。この例を考えると、若さという点がこうした言葉を引き出す一要素とも考えられるが、若者であれば必ず付けられるわけではなく、深く機能しているとはやはり言い難い。
- (16) 拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』における乱の認識と物語の改作」（『中世文学62』2017・6、注3拙著所収）。流布本『平治物語』には仁義の勇者という言葉は登場し、そうした点にも流布本『保元物語』と流布本『平治物語』で価値基準が異なることが見えてくるのであり、この言葉が果たす役割は大きい。
- (17) 本文は赤塚忠氏『新釈漢文大系2 大学・中庸』（明治書院、1967刊）に拠る。
- (18) 本文は釜田喜三郎氏他校注『日本古典文学大系 太平記』（岩波書店、1962刊）に拠る。

## 軍記物語の読みの変遷から考える戦争と平和

- (19) 『太平記』以降の他作品における使用の詳細については別稿で改めて論じたい。
- (20) 本文は今井正之助氏・加美宏氏・長坂成行氏校注『太平記秘伝理尽鈔』（東洋文庫、2007刊〈既刊五巻〉）に拠る。
- (21) 今井正之助氏『太平記秘伝理尽鈔研究』（汲古書院、2012刊）や若尾政希氏『「太平記読み」の時代 近世政治思想史の構想』（平凡社、2012刊）、山本晋平氏の研究が知られている。
- (22) 加美宏氏『太平記の受容と変容』翰林書房、1997刊。
- (23) 流布本になると『保元物語』『平治物語』に血気の勇者という言葉が用いられていくのも、流布本成立当時によく用いられていた考え方が活用されたものと考えられることを以前論じた（注9拙稿）。
- (24) この本は古典教養の書シリーズとして刊行されている。注3拙稿において、このシリーズに『平家物語』はないと記載したが、坂口玄章氏により『平家物語の精神と積義』が刊行されていたため、ここに訂正する。
- (25) 子どもから涙の表現が削除されていることは既に論じた。拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』における子どもの哀話の改作—涙の削除を中心に—」（『伝承文学研究66』2017・8、注3拙著所収）。
- (26) 光頼が弟の惟方を招き寄せ、信頼に味方していることを諷める章段の評にも「惟方をまねきよせ。理をつくしいさめ給ふ事。まことに殊勝なる事どもなり。真実の心ざし通じけるにや。惟方心変じけん。ありがたき忠臣なるべし」としている。
- (27) 本文では基盛は「組で一々に擲取て見参に入よ」と命令を下している。
- (28) 注14同。
- (29) 『平治物語大全』（第六）において、主の義朝を逃がすため囹となつて討ち死にする重成への批評では「青墓のしゆくにて郷人をふせぎ。義朝と名乗て討死し。義朝を落し参らせし事。智謀といひ忠義と云勇猛といひ是古今にぬきんずべし」とし、最後まで主君に仕える姿勢の中に「忠義」を見出していることが分かる。
- (30) 拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の特性」（『国語国文85-5』2016・5）。注3拙著所収。
- (31) 流布本『保元物語』にも孝への言及はあるが崇徳に絡めては書かれていない。
- (32) 論者の口頭発表「西道智著『保元物語大全』『平治物語大全』にみる読みの流動」（2022年1月23日、軍記・語り物研究会一月例会）に拠る。論稿を準備している。
- (33) 注30拙稿。
- (34) 『相良亨氏著作集2 日本の儒学Ⅱ』ペリかん社、1996刊。初出は宇野精一氏他編『講座東洋思想10 東洋思想の日本的展開』（東京大学出版会、1967刊）所収。
- (35) 注16拙稿および注30拙稿。
- (36) 前注同。また、注3拙著も参照されたい。

**【付記】** 本稿は、早稲田大学多元文化学会2023年度春期大会のシンポジウム「戦争と平和」（2023年6月24日）における報告「軍記物語の読みの変遷と社会の移り変わり—『保元物語』『平治物語』の享受から考える戦争と平和—」に、加筆修正をしたものである。

本稿は科学研究費基金・若手研究（JP21K12919）による研究成果の一部である。

# War and Peace Considered from the Changes in the Reading of *Gunkimonogatari*: An Interpretation of *Hougenmonogatari* and *Heijimonogatari* in the Early Modern Period

TAKIZAWA Mika

The reading of the works called “*gunkimonogatari*”, which are based on wars that actually occurred in Japanese history, changed greatly from time to time, and it is well known that in modern times in particular they were used as teaching materials to promote militaristic education. However, it is thought that such a way of reading tales apart from the original text occurred even before the modern era. Therefore, in this paper, I deal with the *rufubon* of *Hougenmonogatari* and *Heijimonogatari*, which was among the *gunkimonogatari* created in the Middle Ages, and examine how these works have been interpreted in the early modern period through an analysis of commentaries called *Hougenmonogataritaizen* and *Heijimonogataritaizen*. By doing so, I aim to consider the issue of “war and peace” as seen from the changes in the reading of *gunkimonogatari*.

In *Hougenmonogataritaizen* and *Heijimonogataritaizen*, the word *kekki no yu* appears to criticize the characters, just as in the *rufubon* of *Hougenmonogatari* and *Heijimonogatari*. However, the criticism is attached to a different person than the one in the tales, or the evaluation of the person criticized in the tales is different in the annotations. In other words, it can be seen that the role of words of criticism and standards of value are different between the two. It's not just the words of comment that change; in the *Hougenmonogataritaizen* and *Heijimonogataritaizen* there is a tendency to praise loyal retainers who sincerely serve their masters until the end. Considering other descriptions, it can be concluded that the *Hougenmonogataritaizen* and *Heijimonogataritaizen* are conscious of a state of mind, and that its focus on the truth of the heart seems to be linked to this.

However, this is a unique tendency of the *Hougenmonogataritaizen* and *Heijimonogataritaizen*, which is different from the *rufubon* of *Hougenmonogatari* and *Heijimonogatari*, and not all of the intentions of the *rufubon* were inherited in subsequent eras. The problem of separating from the original text and reading the tales as one would like to interpret it according to the period is not limited to modern times, but can be said to be a phenomenon that easily arises when reading *gunkimonogatari*. Therefore, we need to understand that even if the main text of *gunkimonogatari* was averse to war, there is a danger that the tales may be used for war depending on the person handling it.